彼が私の部屋に侵入する

夏のラジオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼が私の部屋に侵入する

【Ｎコード】
Ｎ６２２７Ｅ

【作者名】
夏のラジオ

【あらすじ】
夏ホラー２００８～百物語編～参加作品。誰かが私の部屋に侵入した形跡がある。侵入者が彼であるはずはない。ただ、彼はいつも私のことを見ている。

最近ふと

最近、ふと視線を感じることがある。

私はデパート内にテナントを持つ書店に勤務していた。立ち読み客たちの間を割って売り場を整理したり、キャッシャーでレジを打ったりしている時にそれはたびたび起こった。そして、ハッとその先に目を向けてみると、そこにはいつも同じ男の姿があった。

歳は私と同じ、二十代後半から三十代前半ほどだろうか。眉の端が垂れ下がり、気の弱そうな顔をしている。短い髪を整髪量でツンツンに逆立てている。決まってカッターシャツにネクタイ、スラックスを着用している。彼は同じ階にテナントを持つ、ゲームショップの店員だった。二、三年ほど前、そのゲームショップの店名が変わると同時に（おそらく会社自体が変わったのだろうが、詳しい話は聞いていない）、姿を見かけるようになった。

ようやく私にも春が来たのかな、などと考えてしまう。二十代前半の頃に当時付き合っていた彼氏と別れて以来、もう五年以上も男とは無縁だ。実家に帰るたび、『早く結婚しろ』と母にしつこく言われたものだ。

……。

また思い出してしまった。母のことを思い出すと気分が滅入ってしまう。

実家の母が死んだのは、ほんの一週間前のことだった。

疲れた……。

ノースリーブのシャツには汗が染みついている。ジーンズをはいた足はひどく重い。私はハンドバッグの中から鍵を取り出し、玄関

扉の鍵穴に差し込んだ。セミの鳴き声に混じり、ガチャと錠の回る音が響く。
仕事を終え、いつものように三十分以上をかけて、自宅のアパートに帰り着いたところだ。ワンルームのこじんまりとした部屋。玄関を上がるとすぐに短い廊下が現れる。左手にはトイレへ続くドア、バスルームへ続くドア。右手にはキッチン。私はキッチンで手洗いを済ませてから、奥の洋室へ向かおうとした。しかし。
あ、忘れてた。
再び蛇口をひねり、うがいをする。

母は実家で弟と二人で暮らしていた。私が幼い頃に父と離婚し、それ以来、女手一つで私と弟を育ててくれた。二週間前、弟から母が倒れたと連絡があった時、私はショックで頭が真っ白になった。部屋の中を意味もなく歩き回り、ベッドに寝転んではすぐに起き、また寝転んだりした。
母はまだ五十歳だった。優しい母だった。私が子供の頃……。いや大人になってからも、私が何かで悩んでいる時はいつも自分のことのように悩んでくれた。私が東京で一人暮らしをするようになってからは、毎日のように心配して電話をかけてきてくれた。風邪をひいていないか。洗濯はしているか、ちゃんとご飯を食べているか。それを鬱陶しく思った私が、いくら邪険な態度をとっても、母は私を思い続けてくれた。
『手洗いだけじゃなくて、うがいもしなさいよ』
そんな優しい母を私は裏切ってしまったのだ。

軽くシャワーを浴びた後、裸のまま洋室に戻り、クーラーの電源を入れる。タンスの引き出しからパンティを取り出し、それをはく。上にはぶかぶかのティーシャツを着る。鏡台の椅子に座り、ショートカットの髪をドライヤーで乾かしながら、くしで梳く。

「ふう」

息を吐き、ベッドでうつぶせになる。疲れで足がパンパンになっている。目元がチカチカする。明日もまた仕事だということを考えると、うんざりした気分になる。私は枕もとの収納棚の上にある目覚まし時計に目をやった。午後八時過ぎ。眠るにはまだ早い時間だが、眠気も押し寄せてくる。目覚まし時計の脇には母の写真がある。私は写真の中の母を見つめた。私に似た、垂れ目がちの目と丸い顔。若々しいツヤのある黒髪を、頭の後ろで一つに束ねている。

母は笑っていた。やはり、悲しそうな笑顔に見えた。

もう一度、会いたかった。

弟から連絡があってから一週間後、母が息を引きとった後になって、ようやく私は実家へと帰った。職場は人手不足で、休日は週に一度のみだ。とてもじゃないが、臨時休暇をくれなどと言い出せる雰囲気ではなかった。葬式の日に一日だけ休暇をとるのが精一杯だったのだ。

『なんで帰ってこなかったんだ。母ちゃん、姉ちゃんに会いたがってたんだぞ』

喪主を務めた弟には罵倒され。

『いくら仕事が忙しいからってねえ……』

親戚には白い目で見られた。誰もが私を責めているような気がした。ただ、棺の中の母だけは私を許してくれているような……。

そんな気がした。

頭を振り、もうろうとする意識を現実に引き戻す。今眠ってしまうのはあまりにももったいない。朝になれば、またすぐに仕事だ。
私は洋室を出て、キッチンの隣の冷蔵庫から好物のプリンを取り出した。洋室に戻り、テレビを点け、プリンを食べる。晩御飯はもうこれでいいかな、などと考える。仕事の疲れからか、あまりお腹が空かない。
いや、ダメだ。
『あんたはすぐにご飯を抜いちゃう癖があるから……。ちゃんと食べなきゃダメよ』

インスタントラーメンがいくつかあったはずだ。栄養面で見ればそれもどうかとは思うが、とりあえずは口にしておこう。
ラーメンを食べ終えた頃、時刻はすでに九時を回っていた。テレビでは私が毎週楽しみにしていた連続ドラマが放映されているも、内容が頭に入ってこない。眠気はピークに達したようだ。
私は渋々とテレビの電源を切り、部屋の灯りを消してから、ベッドに仰向けで寝転んだ。またふうと息を吐く。
涼しい……。
クーラーの風が優しく足元を撫でる。
タイマー設定を忘れないようにしなきゃ。
そう考えつつも意識は遠く彼方へと。

誰？
心臓の音がドクンドクンと激しく鳴っている。私はベッドから上半身を起こし、ガラス戸の外を凝視していた。ベランダから誰かが

部屋の中を覗いているのだ。
誰なの？
もう一度呼びかける。カーテンは半分開いていた。相手の顔は暗くてよく見えない。男だということだけは分かる。カッターシャツを着て、ネクタイを締めている。
ひょっとして……。
いつも私のことを見ている、例のゲームショップの店員ではないだろうか。なぜ彼がここにいるのか、もちろん私には分からない。
その時、ガラス戸が静かに開いた。鼓動が速くなる。叫び声を上げたいのに、声が出ない。男が部屋に足を踏み入れる。当然、スラックスをはいている。逃げ出したいのに、身体が動かない。

「わ……！」
私はガバッと上半身を起こした。はあはあと息が乱れている。身体中汗だくだ。どこか遠くから聞こえてくるかのような心音に耳を傾けながら、部屋の中を見回す。ガラス戸から陽が差し込み、部屋の中は明るい。ガラス戸に目を向ける。ベランダには誰もいないし、ガラス戸も開いていない。
ゆ、夢か……。
ホッと安心し、深く息を吐く。目をこすり、ベッドから立ち上がる。汗だらけのティーシャツを脱ぎ捨てる。クーラーは止まっているというのに、戸を閉め切っていたため、部屋の中がひどく蒸し暑い。時刻はまだ午前五時を回ったところだ。
……。
ん？
シャワーを浴びようかな、とバスルームへ向かいかけた時、私の心に何かが引っかかった。もう一度部屋を見回す。特に変わったところはないように見えるが。

気のせいかな。
脱ぎ捨てたシャツを拾い上げ、私はバスルームへ向かった。

鏡台の上

「ほら、ぼうっとしてないで手動かして！」

店長に注意されてしまった。私は「すみません」と平謝りしてから、再び単行本の補充作業を始めた。しかし、数分後にはまた気を散らせてしまう。いくら仕事に没頭しようとしても、頭の片隅にこびりついて剥がれないものがある。

今日もゲームショップの彼とはよく目が合った。いや、今日はいつも以上に目が合う。おそらく、昨夜あんな夢を見てしまったせいで、私のほうが彼を意識してしまっているのだろう（夢の中の男が彼だという確証はないのだが）。

ただ、仕事に身が入らない原因は別のところにある。

鍵だ！　玄関の鍵を閉めた記憶がないのだ！

うーん、閉めたような気もするし、閉め忘れたような気もするし……。まあ、もし閉め忘れたとしても何も盗るような物は……。いや、でも下着とかだってあるしなあ。

はあと私は溜息を吐いた。

自分が嫌になってくる。『鍵を閉め忘れたかもしれない』という不安が仕事の妨げとなったのはこれが初めてではないのだ。一人暮らしを始めてから頻繁にある。大抵は家に帰ってみるときちんと鍵を閉めていたことが判明し、杞憂に終わる。その度に、部屋を出る時しっかりと意識して鍵を回そうと心に決めたはずなのに、またこれだ。

お母さん、なんで私ってこうなんだろう。

母からの返事はない。

当たり前だ。

この日は比較的早い時間に仕事を上がることができ、七時前に自宅へと帰り着いた。私は少し緊張しながら、玄関扉のドアノブをつかんだ。ドアノブを回そうとするが……。回らない。良かった。やはり、鍵を閉め忘れてなどいなかったのだ。

ホッと一息吐いてから、私はハンドバッグの中の合い鍵を探した。そのまま十秒、二十秒、時間が経過していく。

あ、あれ……？

鍵が見つからない。忘れて家を出てしまったのだろうか。いや、それはない。鍵は閉まっている。ということは、職場のバックルームにでも忘れてきてしまったのだろうか。しかし、職場でバッグから鍵を出した記憶などない。いや、私の記憶が当てにならないのは私が一番よく知っている。

あとで電話してみようかな。

そう考え、私はとりあえずスペアキーで鍵を開錠することにした。スペアキーは扉の横にあるメーターボックスの中に隠してあったはずだ。ただ、置いておくだけでは不安なので、機器の裏側にテープで貼り付けてある。これは誰の案だったかなと考え、すぐに心が沈む。母だった。

『スペアキーを使う時は辺りに人の目がないか確認しなさいね』

母の言葉どおり、周囲に人の目がないか確認する。スペアキーを使うのは初めてだ。

うん。誰もいないな。

私はメーターボックスの中から鍵を取り出した。

部屋に上がり、キッチンで手洗い、うがいを済ませてから、奥の洋室へ。ベッドの上にハンドバッグを置き、枕元の収納棚の上にスペアキーを置いておく。後でメーターボックスに戻しておこうと思

う。母の写真に「ただいま」と挨拶をしてから、私は浴室へと向かった。
シャワーを浴びた後、私はいつものように裸で洋室に戻り、クーラーをつけ、パンティをはき、ティーシャツをかぶった。そして、鏡台の椅子に座り、鏡に映る自分の姿を眺めた。自分でもそれなりに美人だと思ってはいるが、顔全体にはびこる疲れの色がそれを台なしにしてしまっているような気もする。
『あんたは可愛いからね。男なんて腐るほど手に入るよ』
母さんが生きてるうちに、旦那さんを見せてあげたかったな。
はあと溜息を吐き、私は鏡台の上に置いたドライヤーを手に取った。それから、ドライヤーの電源を入れる。

その時だった。

え……？
背筋にゾッと悪寒が走った。次第にそれが全身へと伝わっていく。
「え？　な、なんで……？」
鏡台の上に『存在してはいけない物』の姿を目でとらえてしまったのだ。
それが意味することはいくら私でもすぐに理解した。私はドライヤーの電源を切り、立ち上がった。鏡台の上にドライヤーを置き、タンスに向かう。ガタッと音がし振り向くと、ドライヤーが床に落ちてしまっていた。しかし、それどころではない。私はタンスの引き出しを開け、下着の枚数を確認していった。
大丈夫。なくなってはない。
下着だけではなく、他の衣服も確認する。異常はない。次に私はベランダへ続くガラス戸を確認した。クレセント式の内鍵はかかっている。こちらはうっすらとだが、かけた覚えがある。しかし、その事実は私を更に不安にさせる。
私は床に落ちたドライヤーを手に取り、コンセントからコードを

抜いた。少々頼りないが、それは武器のつもりだった。ベッドの下、トイレ、物置、人が隠れられそうな場所を順番に見て回る。その間中、あまりの恐怖に私のひざは震えっぱなしだった。心臓は破裂しそうだった。

家の中に人が潜んでいないと確信した私は、ベッドに座り、また大きく息を吐いた。

そうだ……。そういえばあそこに置いておいたんだ。

鏡台の上に見た物。それは見慣れたキーホルダーのついた、職場に忘れてきたと思い込んでいた部屋の合い鍵だった。

「戸締まりに気をつけて」

玄関先。靴をはきながらクリーム色の作業着を着た初老の男が言う。「合い鍵は大家さんにも預けておきますので、もし鍵を忘れて帰宅されたなら大家さんに連絡してください。くれぐれもスペアキーをメーターボックスに隠したりなどしないように」

「はい」

私は申し訳なく頷く。「ありがとうございました」

バタンと扉が閉まり、男の姿が見えなくなった後、私は玄関扉のサムターンを回し、チェーンロークをかけてから洋室へと戻った。ベッドに座り、時刻を確認する。まもなく午後十一時。私はベッドの上に仰向けとなった。

ひと安心かな……。

大家と相談の上、鍵屋を呼び、鍵を変えてもらった。事件の起きた今日中にそれを済ませてしまわなければならなかった。新しい鍵は複製不可能で、ピッキングも困難だという。以前の鍵はどちらも容易かったそうだ。

今朝、私は鏡台の上に鍵を置き忘れて家を出た。やはり玄関の鍵

を閉め忘れていたということになる。しかし、家に帰り着いた時は閉まっていた。つまり、何者かが玄関の鍵を閉めたのだ。中からサムターンを回して閉めるのは不可能。ガラス戸の内鍵も閉まっていたので、侵入者は部屋から出ることができない。可能性はひとつ。合い鍵を使ったのだ。スペアキーを使ったのか、もしくは鍵を複製し、それを使ったのかは分からない。ひょっとしたら、合い鍵を使ったのではなく、ピッキング技術に長けていたのかもしれない。いずれにしても、なぜ部屋の鍵を閉めたのかが分からない。

ねえ、お母さん。私、怖いよ。

うつぶせになり、写真立ての中の母に呼びかける。

なんだか、母も私を心配してくれているような気がした。

重なる足音

「ちょっといいかな」
休憩時間を利用し、地下のレストランで昼食をとったその帰りだった。私にも予想外のことだ。なんとゲームショップの彼が突然私に話しかけてきたのだ。
「は、はい？」
私は激しく狼狽した。必死で動揺を隠そうとするも無駄だった。自分の身体なのに自分でコントロールすることができない。
場所はゲームショップの目の前。彼は照れを隠すように髪の毛を触り、苦笑していた。
「お願いがあるんだ」
彼は言った。「今夜あたり、僕と一緒に食事してくれないか？」
「はあ」
間の抜けた返事も、困惑したような表情も、全ては演技だ。私は怯えている。今すぐ走り去ってしまいたいほど、恐怖にかられている。
今日になって、彼の視線を気味悪く感じ始めた。そのことについて罪悪感もある。確かに昨日、閉め忘れた自宅の鍵が、何者かによって閉められていた。しかし、それが彼の仕業であるはずがないのだ。彼は昨日もしっかりとゲームショップで勤務をしていたではないか。それなのに怖い。彼のことがたまらなく怖い。
全ては夢のせいだ、と私は思った。

そう、また夢を見たのだ。

今度は顔もしっかりと見えた。間違いなく彼だった。彼はなぜか

私の部屋の中にいた。私のベッドの中にいたのだ。私が寝ている隣で彼も寝息を立てていた。逃げ出すことはできなかった。いや、逃げ出すことはしなかった、と言ったほうが正しい。夢の中の私は彼に完全に身も心も委ねてしまっていたのだ。全く意味が分からなかった。

そもそも私はあまり夢を見るほうではない（見ているのだとしても、目が覚めれば忘れてしまっている）。そんな私が、ごく短期間に二つも、しかも似たような内容の夢を見た。

『彼が私の部屋に侵入する』

お母さん？　と私はなんとなくそう思った。死んだ母が夢を通じて何かを暗示しているんじゃないか、と考え始めた。彼のことが怖くなったのはそれからだ。母が暗示しているのが侵入者の存在だとすれば、それは私にとって最もタイムリーな問題なのだ。

「すみません」

私は愛想笑いを作り、できるだけ柔らかい口調でそう断った。「今日は仕事が少し長引きそうだし、また今度にしましょう」

「そうか……」

残念そうにうつむく彼。しかし、すぐに顔を上げる。「明日は休み？」

彼が何気なく言ったその言葉に、私は更に緊張してしまった。そう、休みなのだ。

「あ、はい」

なんとか平常心を保とうとする。別に彼は私の勤務シフトを知っていたわけではない。質問してみただけだ。「一応、休みですけど」

「それじゃ、ちょっとぐらい遅れても大丈夫なんじゃない？」
にこりと笑う彼。「どうかな。俺も明日休みだし、仕事が終わってからゆっくりと……」
「そ、そうですね……」
必死に言い訳を探す。矛盾のない、自然な訳を探す。「実は今、実家の弟が家に遊びに来てまして」
「そうなんだ」
表情を変えず、頷きながら彼は言った。「いつ頃から遊びに来てるの？」
「え？」
私はほんの少しだけ眉をひそめた。
いつ頃から？　そんなことを聞いてどうするの？
また疑ってしまう。

侵入者は知っている。昨日の昼の時点で、弟が家に遊びに来ていなかったことを知っている。

脇腹を汗が伝った。
「き、昨日の夜からですけど……？」
「ふーん、そうか……」
彼は無表情になり、二度ほど頷いた。その様子を私は固唾を飲んで見守った。すると、彼はまた笑顔に戻り、手を振ってみせた。「あ、別に変な意味はないんだよ。初めて君と話ができたから、色々話をしたかっただけなんだ」
「あ、いえ」
色々な話をしたかっただけ？　本当だろうか。「ごめんなさい。私そろそろ戻らないと」
私はチラリと書店のほうを一瞥した。
「うん、ごめん」
ばつの悪そうな顔をし、彼は謝った。「食事の件、いつでもいい

から考えといてね」
私は何も答えなかった。
しつこいようだが、彼が侵入者であるはずがない。たかだか夢ぐらいで自分に好意を持ってくれている彼を突き放そうとする私を、私は哀れんだ。
お母さん、こんなんじゃ私、いつまで経っても結婚できないね。

午後七時にようやく仕事を終え、デパートを出た。電車に乗り、電車に揺られる。やがて、電車から降り立った頃には、空はもうすっかり暗くなってしまっていた。
私は歩きながらまた彼のことを考えていた。いつしか、私の中の彼に対しての恐怖心が、少しずつ薄れ始めていた。昼間の彼との会話を思い出す限り、彼が悪い人間だとはとても想像がつかないのだ。昼間の私は彼に対して怯えきっていたため分からなかったが、今考えてみると彼の笑顔は人に安心感を与える優しい笑顔だったし、声色や口調も心地よいものだった。いきなり声をかけてきて食事に誘うというのは少々強引な気もするが、そういった強引な性格も嫌いではない。気が弱そうに見えるルックスははっきり言って私のタイプではなかったが、なんとなく母が好きそうなルックスだと思った。
母が好きなら私も好きになれそうだ。
もしまた誘われたら、次はオーケーしてあげようかな。

自宅のアパートまであと百メートルほどの地点。その道のりは暗

く、人通りはない。辺りは静かで、私の足音だけがまるで二重になったように強調され、響いている。
二重になったように……？
私は立ち止まった。同時に足音は消える。それから、ゆっくりと後ろを振り返った。誰もいない。人が隠れられそうなところは多々あるが。
また前を向き、歩き始める。始めは普通の足音だ。しかし、しばらくして別の足音が重なり合ってくる。私はそれらの足音とは違う、もう一つの音を聞く。心音の高鳴りだった。
誰かが後ろにいる？　私の後をつけている？　いや。
空耳だ、と私は自分に言い聞かせる。きっと恐怖心が生み出した幻聴なのだ。私はもう一度立ち止まり、振り返ってみた……。

次の瞬間、私は全力で走り出していた。

やっぱり、誰かいる。
後ろを振り返った瞬間、物陰に隠れる人の姿が見えたのだ。顔はよく分からなかったが、その人物はネクタイを締め、スラックスをはいていた。
無我夢中だった。家までの残り短い距離を必死で駆け抜けた。その人物も走って私を追いかけているのかは分からない。確認しようにも振り向いている場合ではない。
アパートに到着し、階段を駆け上がる。そのまま私の部屋の玄関のドアノブを回し、中へと滑り込む。すぐにサムターンを回し、私は必死で息を忍ばせ、覗き穴から外の様子を窺った。人の姿はない。足音も聞こえない。
あきらめてくれたかな……。
ホッと息を吐きかた時だ。
「ひっ……！」
私は逆に息を呑んだ。その拍子にゴホゴホと咳き込んでしまう。

涙目になりながら、なんとか呼吸を整える。
そんなまさか！
そんな馬鹿なことがあるはずはない。昨日の今日なのだ。今朝、しっかりと鍵をかけた記憶もある。しかし……。

今部屋に入った際、玄関の鍵は開いていた。

視界が小刻みに揺れる。すぐにその揺れが自らの震えによるものだと察する。真夏だというのに肌寒くなる。思考が暴れまわったり、停止したりする。
もうやだ。もうやだよ。
私は意味もなく両手で耳をふさいだ。

写真の中の

せっかくの休みだというのに、私はどこへも行かず、ただ家の中でじっと時を過ごした。家中の鍵を閉め、ガラス戸のカーテンを閉め、外界との接触を避けた。時刻はまもなく夕方の五時を回ろうとしている。私はベッドの上でひざを抱え、目覚まし時計の秒針の動く音を聞いていた。

昨夜の出来事が頭をよぎる。あれから、また部屋中を点検して回ったが、やはり誰も潜んではおらず、何も盗られた形跡はなかった。私はまず、実家の弟に連絡を入れた。

『何も盗られてないんなら別にいいじゃん』と弟は言った。誰かに尾行されたということを話しても『姉ちゃんが自意識過剰なだけじゃないの？』とまるで相手にしてもらえなかった。ただ、最後には『うちに戻ってくればいい』と言ってくれた。

実家で弟と二人、いや母と三人でまた暮らしていくのも悪くはないか、と私は思う。どちらにしても、このアパートは近いうちに引き払ったほうがいいだろう。おそらく、これ以上鍵を取り替えても無駄だ。侵入者は魔法使い。きっと、どんな鍵でも容易く攻略し、部屋の中へと侵入してくる。

警察に通報しようかとも考えたが、結局は思いとどまった。弟と同じく、相手にはしてもらえないだろう……。というのは建て前の理由で、本音を言ってしまえば、私はまだ認めたくなかったのだと思う。一昨日鍵が閉まっていたのは、誰かの悪いいたずらで、昨日鍵が開いていたのは、やはり私の鍵のかけ忘れ。誰かに尾行されたのは勘違い。無理のある解釈だと分かっていながらも、認めたくなかったのだ。

もう六時か。

私ははあと溜息を吐いた。朝起きてから何度目の溜息だろう。私は立ち上がり、キッチンへと歩いた。まるで食欲は湧かないが、何か胃に入れておくことにする。冷蔵庫を開け、適当な食材はないかと探す。インスタントラーメンは昼に食べた。二食続けてインスタントラーメンというのもどうかと思うので（昨夜にも食べ、朝食を抜いたので、実際は三食連続となる）、簡単な物でも調理して食べることにした。

冷蔵庫の中から使いかけの玉ねぎと人参を取り出した。私はそれほど料理が得意ではない。料理のレパートリーも驚くほど少ない。この食材から作ることができる料理は野菜炒めぐらいしか思いつかない。しかし、キャベツなしの野菜炒めはかなり寂しい。

天ぷらっていう手もあるか。

私はキッチンの開き戸から、天ぷら粉を取り出した。胃にはやや重たく感じるが、同じく簡単な料理だ。

野菜を切り終えてから、ボウルに天ぷら粉を水で溶く。そうこうしているうちにだんだんと楽しくなってくる。いざ始めると料理の楽しさに目覚めてしまう（そして、食事を終えた頃にはまた忘れる）。

鼻歌を歌いながら、揚げ物用の鍋にサラダ油を注ぐ。それから鍋を中火にかける。その時、私はあることに気がついた。

……。

ご飯がないな。

もともとご飯を炊く習慣など私にはない。いつも、レンジで調理するパックのご飯を買い置きしているが、今はそれを切らしてしまっている。私はガスコンロの火を弱火にして、しばらく本気で悩んだ。ご飯をあきらめるか、もしくは今から外出して調達してくるか。アパートからわずか五十メートルほどの場所にコンビニエンスストアーがあり、そこでパックのご飯が販売されていることを私は知っていた。

昨夜の帰り道でのことを思い出す。ビジネス服を着た男を思い出す。重なり合う足音を思い出す。私は洋室まで歩き、カーテンの隙間から外を覗いた。まだ空は明るい。真夏なので、暗くなるのは七時を過ぎてからだろう。

よし、と私は決心し、鍵と財布を手に玄関へと向かった。サムターンを回し、扉を開け、扉の隙間から顔を出し、辺りの様子を窺った。

……。

人影はない。

外に出て鍵を使い、玄関の錠を閉めた時、キッチンの電灯を点けっぱなしにしているということに気がついたが、私はそのまま歩き始めた。どうせ、家を空けるのは十分程度の間だろう。

ああ、私ってなんでこうなんだろう。

手に提げた買い物かごを揺らしながら、私は走ってアパートまで戻ってきた。家を出てから五分も経過していない。

火だ！

キッチンの電灯なんてどうでもいい。油を火にかけたままだ。

階段を上がり、自宅玄関の扉のノブを回そうとする。しかし、回らない。そうだ、鍵をかけたのだった。慌てて下に履いたジャージのポケットから鍵を取り出し開錠する。

あ、あれ……？

扉を開けてすぐに、私はその異常さに気がついた。それは部屋に上がらずともすぐに分かった。まず、キッチンの電灯が消えていた。

それから、コンロに目を移すと……。やはり、コンロの火も消えていた。

「誰よ！」

玄関先で私は叫んだ。自分でも驚いてしまうほどヒステリックな叫び声だ。「誰かいるの！？」

部屋に上がり、キッチンの引き出しから包丁を取り出す。震える刃先を進行方向に向け、ゆっくりと歩き出す。洋室にて「なんでこんなことするの！？　警察呼びますよ！」とまた叫ぶ。返事はなかった。

数分後、キッチンの引き出しに包丁をしまってから、私は洋室のベッドに力なく腰かけた。ベランダにもベッドの下にも、トイレにも浴室にも押入れにも、人は潜んでいなかった。何か盗られたものはないか。それは確認しないでも明らかだと思った。

食欲など完全に失われてしまった。思考回路は機能を忘れ、頭が真っ白になっている。私はこれから何をすべきなのか分からず、とりあえず収納棚の上の目覚まし時計に目を向けた。もちろん、それが最善の行動なのかも分からない。時刻は七時を迎えようとしていた。ゆっくりと忍び寄る宵闇の足音に恐怖を覚える。

すると突然。

その恐怖感が大きく膨れ上がり、私の心を、身体を、隙間なく侵食していった。

「な、な、なんで……？」

私は目を見開いていた。ある一点に注目したまま、身体を硬直させていた。今までに体感したこともないほどの恐怖に、心臓がばくばくと大きな音を立てる。

目覚まし時計の横、写真立てに入った母の写真だ。写真の中の、いつも笑っているはず、笑っていなければならないはずの母が……。

なんで？　なんでよ……。

鬼のような形相で私を睨みつけていたのだ。

「なんで？　お母さん、なんで？」

私は母の写真に問いかけた。自分でも何をしているのか分からない。「あんなに優しそうに笑ってたじゃない。なんで、そんなに怒ってるの？」

母は返事をしない。私を睨みつけたままだ。いつしか私の中の恐怖は悲哀へと姿を変えていた。

やっぱり、お母さんが倒れた時、私が家に帰らなかったから？　それで私を恨んでるの？　だから、私に嫌がらせばかりするの？

今までに私の周りで起きた不可解な出来事が、全て母の仕業によるものだと私は確信し始めていた。あえて言うが、私は霊感などないし、霊的な存在についても、どちらかというと懐疑的だ。しかし、信じざるを得ないではないか。鍵をかけたこの部屋から、侵入者はどうやって抜け出せたというのか。それに、写真の中の母の表情がどうやって変わるというのか。

答えは一つしかない。

侵入者は母だ。私を憎む母の魂が今もこの部屋の中にいる。

お母さん？　お母さんなの？

相変わらず母は返事をしない。私は恐怖からではなく、悲しみからこみあげてくる涙の気配を察知した。次第に母の顔が涙でかすんでいく。

え？

出し抜けに家のチャイムが鳴った。反射的に玄関のほうへと顔を向ける。最初のチャイムからほどなくして、二度目のチャイムが鳴る。

私は少しだけ不安になる。

そういえば、さっきコンビニエンスストアーから帰った際、玄関の鍵をかけるのを忘れていた。

親不孝者

二度のチャイムの後、今度はノックの音が聞こえた。それも二度繰り返される。私は音を立てないようにキッチンまで歩き、腕で涙を拭った。それから、しばらく玄関の扉を凝視していた。また、昨夜のことを連想する。私の後を尾けていた、ビジネス服姿の男。

ねえ、お母さん。あれも私を怖がらせるために、お母さんが見せた幻だったの？

幻……。そうであってほしいと願う。信じる。しかし、私はなかなか訪問者を出迎えることができなかった。またドンドンとノック。前回よりも荒々しいノックだ。一瞬、驚いて声を上げそうになってしまったが、同時にあることに思い当たった。ひょっとしたら、先ほど私が騒いでしまったせいで、隣、また下の階の住人が苦情を言いに来たのではないだろうか。

もしそうだとしたら、無視するわけにもいかない。私は「はい」と返事をし、扉へ駆け寄ろうとした。が、その時だった。

プルルルル。プルルルル。

洋室の電話台の上に置かれていた電話が唐突に鳴り響いた。もちろん、私は驚愕した。私は全ての連絡を携帯電話で済ませている。部屋を借りた時に元から備え付けられていたその電話は、どこにも繋がっていないはずなのだ。ただ、その驚愕も長くは続かない。すぐに一つの考えに思い至ることができる。

お、お母さん？

母が鳴らないはずの電話を鳴らせた？　いったい何のために？

頭がパニックとなり、私は洋室のほうに目を向けたまま、ぼうっと立ち尽くしてしまった。
ガチャガチャ。
え……？
不気味なその音は玄関扉のドアノブから聞こえているようだった。おそるおそる扉に近づいてみる。『その事実』を認め、私はひどく狼狽した。なんと、訪問者がドアノブを回そうとしているのだ。騒がしくされて頭に血が昇っているのだとしても、勝手にドアノブを回すというのはいくらなんでも非常識ではないか。ますます頭が混乱する。
ただ、ドアノブは回らない。鍵がかかっている。しばらくすると音が消え、扉の向こうに人の気配がなくなる。足音も遠ざかっていく。どうやらあきらめてくれたらしい。私はふうと大きく息を吐いた。
怖かった。もし鍵をかけてなかったら……。
え……？
鍵をかけてなかったら？　いや、鍵はかけていなかったのだ。ということは、やはり母が？　この部屋の中にいる、私を憎む母の魂が？　いや……。
違う！
違うじゃないか！
私の脳裏に閃光が走った。小さく開いた傷口から、その衝撃がじわじわと全身へ伝わっていく。
手先がしびれ始める。
また目の奥が熱くなっていく。
私は一度つばをゴクンと飲み込んだ。
息が荒くなる。

まるで呼吸のしかたを忘れてしまったかのように、不規則なリズムが口からこぼれる。

お母さん、お母さん……。

私は足をふらつかせながら、洋室へと歩いた。ベッドの枕もと、収納棚の上の母の写真を手に取る。写真の中の母はすでに笑顔に戻っていた。

その瞬間、私はひざから崩れ落ちた。

フローリングの床の上、写真を抱きしめて私は泣いた。

声を出さずにむせび泣いた。

私は馬鹿だ。

世界一、親不孝な娘だ。

あんなに優しかった母。

いつも私を思ってくれていた母。

そんな母が私を憎んで？

そんなわけないじゃないか。

母は私を守ってくれていたんだ。

一昨日、鍵を閉め忘れた時は鍵をかけておいてくれた。

昨日かけたはずの鍵が開いていたのは、私が追われていたからだ。

さっき、消し忘れたはずのコンロの火が止まっていたことで、私の不安はついに臨界点を超えてしまったが、全ては私のこのずぼらな性格が悪い。

写真の中で私を睨みつける母だって、ただ単に私を叱ってくれていただけに違いない。

私は母が死んでも尚、母に心配をかけ続けている。
　挙句の果てには、実家に帰ってこなかった私を憎んで、母が嫌がらせをしているなどと。

どこまで、どこまで私は親不孝者なんだ。

ごめん。ごめん、お母さん。
お母さんの愛情に気がつかなくて、いつまでも心配ばかりかけて、本当にごめん。

「え……？」

私の背中に二つの腕が回った。
やがてそのうちの一つが私の後頭部へと移動する。
私は涙目のまま、目の前を見た。そこに母の胸があった。
私は母の胸の中にいた。

お母さん……。

母は私の頭を優しく撫でていた。
私も母の背中に腕を回し、思いきり抱きしめた。懐かしい母の香りに包まれる。
耳元で母が何かを囁いた。その言葉を聞き、私は泣きじゃくったまま何度も頷いた。

これからは気をつけるから。鍵もちゃんと閉めるし、火だって消し忘れないようにする。約束する。だから、もう心配しなくても大丈夫だよ。ね、お母さん。

二度と訪れるはずのなかった母との時間。その最後の時間を、そして最後の母の言葉をいつまでも、いつまでも胸に抱きしめておこうと私は誓った。

『幸せになりなさい』

母の写真を収納棚の上に戻し、私は携帯電話を探した。とりあえず警察に電話しておこうと思った。侵入者はいなかったが、私の身の安全を脅かす人物は間違いなく存在している。

母が教えてくれたではないか。

鳴らないはずの電話を鳴らして、閉め忘れたはずの鍵を閉めて。あの時、私は絶対に扉を開けてはならなかった。

扉の向こうにいたのは、おそらく昨日私の後を尾けていた人物だと、なんとなくそう思う。ネクタイを締めて、スラックスを履いた男。夢の中で私の部屋に侵入してきた男。

あ……。

その時私は気がつく。

一昨日、玄関の鍵を閉めたのが母ならば、そこにまた彼の存在が浮上してくる。ゲームショップの彼。彼もまた今日は休みだと言っていた。

やっぱり、あの人が……？

鏡台の上に携帯電話を見つけ、私はベッドに座り、携帯を開いた。近所の交番の電話番号をメモリー登録していたはずだ。その番号を

探す。その番号に電話をかける。
数分後、通話を終え、収納棚の上に携帯を置く。今からうちに警官を向かわせてくれるとのことだった。私は精神的にいくらか楽になり、背伸びをしてベッドに仰向けになった。

ん？

ガラス戸がガタッと音を立てた。そちらに目を向けるも、カーテンが引かれているため、外の様子を窺い知ることはできない。先ほど外出した際はそれほど風の勢いを感じなかったが、今になって強まったのだろうか。不審に思い、私はゆっくりと立ち上がってガラス戸に近づいた。そして、祈るような気持ちでそっとカーテンをスライドさせる。

「……！」

声にならない叫び声を上げ、私は目を見開いた。
逃げ出そうとした足が絡まり、床に尻餅をつく。

ベランダに男がいた。男はネクタイを締め、スラックスを履いていた。

親不孝者（後書き）

次回、ラストです。

きっと

どうすれば……。私はどうすればいい？　最も賢明な方法として、私は何を選択すればいい？

ベランダに男がいる。男が私にとって脅威となる存在だということもまた確実だろう。ただ、ガラス戸の鍵は閉まっている。玄関の鍵だって閉まっている。男は部屋に侵入することができないし、間もなく警察がうちを訪ねてくるはずだ。

だからといって、このままじっとしておくべきなのだろうか。それが最善の選択なのだろうか。

男が窓越しにニヤリと不気味な笑みを浮かべる。それから、右腕をかかげてみせる。その手には何かが握られていた。私はすぐに認める。ドライバーだ。そして、彼が何をしようとしているのかも。

私には彼を黙って見すえ続けることしかできない。ガタガタと身を震わせながら。一刻も早い警察の到着を願いながら。

ガシャ。

たった一撃だった。たった一撃で、さほど大きな音も立てずにガラスはもろくも砕け散り、戸に小さな風穴を開けた。

そんな……。嘘でしょ？

男は更に何度かドライバーを戸に叩きつけ、穴を少しずつ広げていった。私は尻餅をついた体勢のまま、後ずさりをした。穴から男の腕が伸び、内鍵のクレセントを回した。彼に背を向け、四つんばいでキッチンまで逃げる。立ち上がることはできない。腰に力が入らない。

「知ってた？」

当たり前のように話しかけてくる彼。もう、すでに部屋の中へと入ってきている。「ライターで熱した後、濡れたハンカチで冷やしてやれば、ガラスはすごく割れやすくなるし、音も小さくなるんだ

ってさ。前にテレビでやってた。親切だよね。テレビって」
玄関まで達したところで私は向きかえった。このまま玄関を開けて外に出ても逃げ切れる自信がないし、玄関を開ける気力さえもない。
「た、た、助けて……」
自分では叫んだつもりだった。しかし、実際は蚊の鳴く程度の声しか出ない。
「助けてってどうゆうこと？」
男の表情が一変した。眉を吊り上げ、口を真一文字に結ぶ。「まるで僕が君を襲おうとしてるって言い方だよね。そんなはずはないだろ？　僕と君の仲じゃないか」
「し……」
駄目だ。やはり声が出ない。変わりに口から漏れるのはガチガチとぶつかり合う歯の音だけ。
「毎日毎日顔を合わせてるし、昨日は君を家まで送ってあげたじゃないか」
じりじりと迫ってくる男。手にはしっかりとドライバーが握られている。「その恩を忘れてさ。居留守は使うわ、部屋から閉め出すわ、いったいどうなってんの？」
「し、し……」
ようやく私はお腹の底から声を絞り出すことができた。「知りません！　あなたのことなんて私……。全く知りません！」
男はやや肌の色が濃い、四十代前半ほどの中年男性であった。
「知らない？」
信じられないといった表情を浮かべる男。「どうして？　いつも会ってるじゃないか、電車の中で僕が疲れた顔をしていると、君は

いつも優しく穏やかに微笑みかけてくれるじゃないか。色んな話を僕に聞かせてくれるじゃないか」
「知らない！　知らない！」
私は必死で首を横に振った。目を見開く男。怒りからか、身体中を震わせ始める。
「僕を……」
ドライバーを持つ右手を振りかぶりながら彼は言った。「僕を騙したな！」
目をつむり、私は思わず心の中で叫んでしまった。
お母さん……。お母さん、助けてぇっ！
すると、ほぼ同時に外を走る足音が近づいてきた。次の瞬間には玄関の扉が勢いよく開けられ、私は反射的に背後へと目を向けた。そこになんと……。
「あ、あなたは……」
短髪頭に気の弱そうな顔。今日はいつもとは違い、白いティーシャツとブルージーンズを着用している。
そう、彼だった。
ゲームショップの彼だった。
彼は私と男を交互に見比べた後、すぐに私の脇を通り、部屋へと足を踏み入れた。
『彼が私の部屋に侵入する』
ゲームショップの彼に飛びかかられ、身体を押さえつけられた際には、男はまだ意味不明なことを口にしながら暴れまわるなど、抵

抗の姿勢を見せていたが、やがて二人の警官が駆けつけた頃にはそんな元気もなくしてしまったのか、おとなしくすんなりと現行犯逮捕された。

「なんでか分からないけど、気がついたらここに来てた」
ゲームショップの彼が言う。交番にて簡単な事情聴取を受けたその帰りだ。時間はおそらく午後八時から九時程度の間。私は彼の顔を、彼はところどころ星の光る夜空を眺めながら、肩を並べて歩いていた。「信じてくれないかもしれないけど本当なんだ。君がどこに住んでいるかなんて全く知らなかったのに」
「いえ、信じます」
私は首を振る。「あの時は私も、あなたが来てくれるなんて想像できなかったけど、今考えれば納得できます」
「納得？」
私に顔を向け、目を丸める彼。
「まあ、それは置いといて」
私はふふっと微笑んでみせた。「あなた、見かけによらず、けっこう強いんですね」
一瞬呆気に取られたように「へ？」と眉を曲げる彼だったが、すぐに吹き出し、照れ隠しなのか指先で鼻の頭をかいた。
「せっかく助けてやったのに、なんだよその言い草」

「ま、とにかく災難だったね」
ふうと息を吐いてから彼は言った。私の部屋の玄関の前に到着し、二人は向き合って立っていた。「とりあえずは安心だろうけど、ちゃんと戸締まりして寝なきゃ駄目だよ」
母のようなことを言う。私は苦笑して頷いた。

私に事情聴取をした刑事の見解によると、あの中年男性は毎日電車の中で見かける私に対して特別な感情を抱き、自分の中で勝手に妄想を膨らませていったのではないかとのことだった。いつしか妄想と現実の境目がなくなり、今回のような凶行に及んでしまった……。

私はそれを聞いた時、戦慄とは別に、底の見えない悲しみを覚えた。彼のことを思う人物がどこかにきっといるはずなのだ。根拠はないが、今の私にはそう思えた。彼を自分と重ねていた。

「ありがとうございました」

丁寧に頭を下げる。「本当にあなたが来てくれたおかげで私は無事でいられました。何度お礼を申し上げればいいのか分かりません」

「いや、そんなに気にしないでいいよ」

首を振るゲームショップの彼。「さっきも言ったとおり、自分でもよく分からないままここに来ちゃったわけだし」

「でも……」と彼は続ける。「ひょっとしたら俺の心の中を読んだ神様が、好意でここに連れてきてくれたのかもしれない」

「心の中？」

「いや、こっちの話」と彼。また鼻をかく。

「それじゃあ」

背を向けながら、彼は軽く片手を挙げた。「俺、そろそろ帰るわ。また明日ね」

私も会釈をすると、彼は愛想笑いのようなものを浮かべ、おもむろに歩き出した。その時私は心の中で自然に、都会を流れ行く川の水がいずれ海へと帰っていく様のごとく、ごく自然に母の笑顔を思い描いていた。

お母さん……。

自分の趣味を娘に押しつけるのって良くないと思うな。確かに私

はあんまり男を見る目を持ってないけど、それでも自分の相手ぐらい自分で見つけます。

「あの……」
彼の背中にそう呼びかける。彼が「え？」とこちらを振り返る。
「どうしたの？」
常夜灯の薄明かりが彼の顔を照らし出す。

私は改めて思った。やはりタイプではないなと。
それなのに……。

それなのに、私は彼に惹かれている。

お母さんがどうしてもって言うんならしかたないか。
でも、これで最後だよ。もう私のことを気にかけないで。
私は大丈夫だから。
お母さんが選んでくれた人ときっと……。

勇気を振り絞って、私は言った。
「部屋で、お茶でも飲んでいかれませんか？」

彼が私の部屋に侵入する　－ｆｉｎ－

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6227e/

彼が私の部屋に侵入する

2010年11月10日02時19分発行